学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588東京都豊島区
目白1丁目5番1号
電話 03（3986）0221内線2607
http://www-cc.gakushuin.ac.jp/~press/
press@gakushuin.ac.jp
発行・編集人　原俊太郎
年間500円

3部門で完全制覇

2連覇達成、常勝復活へ

総合優勝　通算45回目

厳しいコースを乗り越え、ゴールへ向かう小林選手

10月21日から23日の3日間、成城大学にて第56回四大学運動競技大会が開催された。期間中、一時小雨が降ることもあったが、最終日は快晴に恵まれ、青空が会場を包み込んだ。そのような中、今大会も大きなトラブルはなく、円滑に競技が行われた。

本学は正式種目、一般種目、教職員種目の全部門で優勝し、総合優勝を飾った。第33回大会以来、23年ぶりに果たした完全制覇。熱き戦いを繰り広げた選手たちの3日間を振り返る。

正式種目

優勝の歓声が舞う
バドミントン女子

【21、22日　大学体育館】
21日、本学はシングルスを得意とする武蔵大を3―2で下し、続く成城大を5―0と封じ込めた。そして優勝へ弾みをつけて臨んだ22日、昨年の雪辱を胸に戦った成蹊大に、4―1と快勝した。

試合はシングルス3本、ダブルス2本で行われた。第1試合のシングルスでは、笠井絢子選手（政2）が安定した試合を展開。力強いスマッシュや不意をつくドロップで敵を翻弄していく。相手が仕掛けるフェイントもかわし、2―0とチームに勢いをつけた。

第2試合は阿部真理恵主将（法3）のシングルス。両者ともに序盤からミスが重なり、サーブ権を奪い合う。だが、ここで阿部主将が膠着状態から抜け出した。真っすぐに伸びたレシーブが相手コートに突き刺さる。驚異の粘り強さでラリーにも競り勝ち、2―0と、主将としての貫禄を見せつけた。

ダブルス1試合目は速攻技が冴える江川なつみ選手（史3）・笠井選手ペア。甘い球をスマッシュで叩き込み、息の合った攻撃で相手を圧倒していく。優勝の風が吹き始めた2セット目。ところが、まさかの苦戦を強いられる。相手にショットが読まれ始めたこともあり、今度は2人の息がなかなか合わない。互いに声を掛け合いながら、我慢の試合が続いた。しかしながら、徐々に相手のフェイントを読む巧妙な作戦が功を奏し、ミスを誘い始める。最後は相手のミスでポイントを奪い、2―0。この勝利によって本学の優勝が決まり、喜びの声が会場に響き渡った。

優勝の酔いも覚めやらぬうちに始まったダブルス2戦目は、阿部主将・井塚倫子選手（史3）ペア。優勝の波に乗る2人は、左右の速攻で相手チームの態勢を崩していく。ショットを決めるたび、コートを囲む仲間から歓声と拍手が起こった。ミスで点数を詰められる場面もあったが、小柄ながら切れのある攻撃で2―0。余力を残し、次のシングルスにつないだ。

団体戦を4―0で迎えたシングルス第3試合。新田裕香選手（政2）がネット際で落ち着いたラケットさばきを見せる。しかし、相手のショットに対応しきれず、1―2で競り負けた。

完全制覇の結果に「実力通りにいけば、絶対に優勝できると思っていました。周りからの応援にも助けられましたね」と、阿部主将。その言葉には、余裕すら感じられた。この優勝さえ、彼女たちにとっては、ステップアップの序章に過ぎないようだ。（石崎知世子）

江川（右）・笠井ペアの追熱した攻撃

頂上への道険しく
駅伝男女

【23日　駅伝コース】
四大戦で毎年一番の盛り上がりを見せる競技と言えば、やはり駅伝だろう。今年も4大学の応援団やチアリーダーをはじめ、多くの観衆で賑わった。

四大戦の駅伝は、1・5㎞のコースを女子は1人2周、男子は4周する。そして各大学4人1チームでA、Bの2チームが出場し、合計タイムで順位を決めるという内容だ。

まず、午前10時に女子がスタート。本学A1区の長野萌選手（営2）は順調なスタートを切り、公道の方へと駆け上がっていく。その後本学Aは1、2区ともに先頭と一定の距離を保ち、期待の3区、宮本多樹選手（法4）につなぐ。

ここで宮本選手は破竹の勢いを見せた。「途中苦しかったけれど、後方の武蔵Aがスパートをかけてきたので頑張れました」と振り返る。4位から2位へ好調に順位を上げ、アンカーの恩田佳枝選手（心4）に優勝への望みを託した。

恩田選手は1位に追いつくため、無我夢中で走り始める。が、迫ってくる武蔵A、Bにあえなく抜かされてしまう。成城Aは追い越したものの、結局3位でゴール。

レース後、チームリーダーの宮本選手は「優勝を狙っていたので、3位で終わってしまい悔しい」と語った。一方、本学Bは最下位でこのレースを終え、総合順位は4位であった。

男子は昼過ぎの12時半からレースが始まる。本学A1区、牧野正洋選手（法4）の出だしは快調。その後も安定した走りで、1区を4位で終えた。2区で本学Aは順位を一つ落としてしまい、5位でたすきリレー。しかし、本学Bの柴田淑哉選手（営4・としや）は本学Aをも抜き去り、3位まで躍進する。続く3区では本学A、竹下廣大選手（仏3）が懸命に前方の選手との差を縮め、意地の2人抜き。一気に2位まで浮上し、2連覇への期待が膨らむ。

最後の4区、本学Aのアンカー小林洋平選手（営4）は、たすきを受け取るといきなり全力疾走。逆転へ向け、一心不乱に走り始める。しかしながら、序盤から独走状態だった成城Aの姿をとらえることができない。必死の追い上げもむなしく、2位でゴールテープを切る。そして本学Bは5位でフィニッシュ、総合2位と健闘した。

「今回のコースはアップダウンが激しく、厳しいレースでした」と小林選手。本学Bのアンカー松代大介選手（済4）は、「総合2位は残念でしたが、悔いはないですね。メンバー全員が全力を出し切れたと思います」とチームをたたえた。

残念ながら、男女ともに目標である優勝には届かなかった。だが、観衆をここまで興奮させたのは、彼らの粘り強い走りがあったからだ。来年は、一体どのような走りを見せてくれるのだろうか。（佐藤貴裕）

演武会

【21日　50周年記念講堂前】
四大戦初日、武道の型を披露する演武会が行われた。演武をする選手たちからは、並々ならぬ意気込みが感じられる。

先陣を切るのは、合気道だ。まずは1年生による基本技。半年前に始めたとは思えない、流れるようなフォームである。そして2年生の自由型、3年生の徒手変化へと続いていく。上級生になるにつれ、動作一つ一つの優美さが増す。最後に、今村圭吾選手（法3）による多人数掛けが演じられた。選手2人を今村選手が投げ飛ばす。アクション映画さながらの演武に、観客からは歓声が沸き起こった。

次の種目は空手である。最初は揃っての突き、それから3、4人での息の合った型の披露だ。合気道や空手は4大学とも流派が異なるので、型も大学によってそれぞれ。興味のある方は比べてみるのも面白いだろう。型の後は板四方割り、飛び板蹴り、バット割りのパフォーマンスへと移る。それが終わると、本学恒例、瓦の頭割りだ。観客が息をのんで見守る中、一瞬で瓦が粉々に。思わず感嘆の声が上がる。だが空手で一番の盛り上がりを見せたのは、最後の演技だった。部員が瓦を用意する。ここまでは普通の瓦割りだ。しかし、ここからが違う。それに油を注ぐと次の瞬間、瓦が燃え出した。片桐未久良選手（政1・みくら）はひるむことなく炎に包まれた瓦に近づき、気合の一手。5枚すべてを真二つにした。これぞ名物、火炎瓦割である。勇気ある片桐選手に惜しみない拍手が贈られた。

最終種目となるのが少林寺拳法。これは4大学が一斉に演じる。気合の入った声が講堂前に響く。組手が終わると防具をつけての実践へと続く。まずは女同士の勝負、2人とも足技で互いを攻める。その後の男子の対戦は、回を追うごとに荒々しくなっていく。周りにいた小学生たちも、彼らに釘づけであった。

どの柔術も最後に礼をする。日本の美徳であるこの習慣、そしてこの競技を永く引き継いでいってほしい。（山田絵美）

土壇場からの逆転劇
卓球男子

【21日　大学体育館】
武蔵大と成城大の棄権により、正式卓球は正式種目から除外されてしまった。しかし、本学と成蹊大にとって、そんなことは気にならない。両者一歩も譲らない二大戦が始まった。

昨年、成蹊大に苦汁をなめさせられた本学。そのため、試合前から気合が入っていた。ところが開始直後、その気合が空回りしてしまう。前半のシングルス2本でストレート負けを喫し、早くも追い詰められる。だが、そんな最悪の状況から本学は息を吹き返す。

土壇場で迎えた第3試合、山下紘平選手（化3）と臼田和哉選手（済1）のダブルスが力を発揮。終始試合の主導権を握り、常に先手で攻撃を仕掛け、相手を圧倒する。そのまま相手にペースを譲ることなく試合を終わらせた。

この勝利で本来の強さを取り戻した本学の勢いは止まらない。ダブルスにも出場した4番手の山下選手がここでも活躍。自らの武器であるドライブを駆使して相手を攻め立てる。この強烈なドライブを相手はブロックできない。次々と得点を奪い、瞬く間に勝負をストレートで決めた。

ラストに登場したのは、こちらもダブルス出場の臼田選手。プレッシャーがかかるこの場面でも、まったく動じる様子はない。得意のサーブで相手を翻弄、何本も得点していく。さらにはドライブやバックハンドも冴え渡る。次々と相手との差を広げていき、気がつけばマッチポイントを握っていた。最後もサービスエースで相手を一蹴。余裕のストレート勝ちを収め、本学がゲームカウント3―2で団体戦を制した。

試合の勝敗が決した後、全員が安堵の表情を浮かべていた。正式種目でなくなったとはいえ、真剣勝負に変わりはない。すべての選手がそんな意識を持っていたことの表れであろう。

規定により、この勝利は総合得点には加算されない。しかしながら、彼らの戦いは確実に四大戦を盛り上げてくれた。優勝を果たした卓球部に、心からエールを送りたい。（嶋先伸人）

冷静にレシーブする臼田選手

大差をつけての総合優勝
第56回四大戦総評

23日、3日間にわたる戦いを終え、成城大学50周年記念講堂では、第56回四大学運動競技大会の閉会式が行われた。会場に姿を現した選手たちは、心なしか穏やかに見える。おそらく彼らは競技を終え、ようやく緊張から解き放たれたのだろう。しかし閉会式が始まると空気は一転。いつの間にか会場内は、厳粛な雰囲気へと変わっていった。

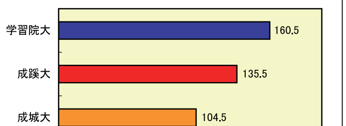
閉会式では、まずはじめに成績発表を行う。本学は、正式種目でバドミントン女子などが実力を遺憾なく発揮。例年何が起こるか分からない一般種目は、卓球男女、ソフトボール男女などが好成績を残し、次々に得点を獲得していった。そして近年成績が振るわなかった教職員種目も、大幅に順位を上げた。また、1位を逃した競技でも、多くが上位をマーク。こうした積み重ねが全3部門の優勝をもたらし、本学は栄えある総合優勝に輝いた。発表の瞬間、選手たちからは大きな歓声が上がる。

この高揚した気持ちは、続く優勝杯・賞状授与で最高潮に達した。各部門の選手代表は優勝杯を受け取ると、それを高らかに掲げた。このパフォーマンスに応えるように、本学の選手たちは盛大な拍手を送る。彼らは2年連続の優勝に歓喜していた。その一方で、会場には、本学の優勝を拍手でたたえる他の3大学の選手たちの姿もある。その光景は、4大学が、56年の歳月を経て四大戦を創りあげてきた歴史を物語っていた。

今年の四大戦のスローガンは「刻（とき）」。この言葉通り、4大学は、たったひとつの刻を共有したのではないだろうか。勝負には勝敗がつきものだが、それがすべてではない。特に四大戦では、競技を通して、他大学との交流を深めることも大切である。また、これは四大戦本来の目的でもあるのだ。他の3大学の選手たちも、そのことを心得ている。だからこそ、敗れたことへの悔しさがあっても、優勝した本学を祝福してくれたのだろう。

閉会式の最後に、大会旗が当番校の成城大学から本学に引き渡された。そう、来年の当番校は、本学なのだ。この瞬間から来年への戦いはすでに始まっている。選手たちには、3連覇に向けて優勝におごることなく、さらに実力を高めていくことを期待したい。（中谷美穂）

第56回四大学運動競技大会　得点結果



四大戦とは

四大戦とは、本学・成蹊・成城・武蔵の4大学によって行われる大学対抗の競技大会である。旧制高校の流れをくむ4大学が交流を深めることを目的に、昭和25年、本学で第1回大会が開催された。以来、毎年各大学の持ち回りで開かれ、今年で56回目となる。

本大会は、運動部が出場する正式種目、学内予選を突破した学生が出場する一般種目、教職員が出場する教職員種目で構成されている。そして、正式種目と一般種目の合計得点で総合優勝が決まるのだ。

24連覇をかけた一昨年、本学は正式種目で優勝するも、一般種目で最下位となり、まさかの総合2位。しかし昨年は総合優勝を果たし、再び優勝旗を手にした。

小休止

昨年度から、四大戦期間中にお弁当が出るようになった。そこで不思議なことがあったのだ。初日3種類あったお弁当が、2日目は2種類、最終日には1種類に。なぜか同じものを選び続けた私は、少し悔しい思いをした。（椿）

攻守に輝き放つ

男女揃って頂点に立つ ソフトボール男女

【22、23日　第1、第2クラウンド】

ゲームセットの瞬間、歓喜の声を上げる選手たち。その顔には心からの笑みが浮かんでいた。今年、本学は男女で本種目を制した。

成城大との女子決勝に臨んだ2戦目は、1回表をいきなり先頭バッターがヒットを放つ。1アウト後、続く3番打者が振り抜いたボールがセンターの頭を越えていく。センターがボールを追いかける間に、打った打者もホームを駆け抜け、なんとランニングホームラン。早くも2点を先制する。

その裏、いきなり先頭バッターを打たれ、相手に得点を与えない。

その後4回表までは、両チームともに行進が続く。

その均衡を破ったのは、本学の打線であった。4回表、本学はヒット4本の集中打で相手投手を打ち込む。さらに守備面のエラーにもつけ込み、得点を重ねていく。最後は内野安打の間に3塁ランナーが走り込み、試合終了。この回に一挙5得点を挙げ、7－0コールド勝で優勝を決めた。

その翌日には、SHIGEO本学AVと成蹊Gの男子決勝が行われた。昨年、同じ学習院のチームに負けたことをバネに、この1年間練習してきました。目指すのは優勝しかありません。そう力強く語ってくれたのは、石橋・輝選手（営4）。その言葉通り、本学はチーム二丸となって優勝の2文字へと突き進んでいった。

ここまで圧倒的な強さで勝ち進んできた本学。しかし決勝では、序盤からチャンスを作るものの、あと1本が出ない。1回表には、3塁打で得点圏にランナーを置きながらも、続くバッターが凡退。先制のチャンスを逃してしまう。

そんな打線に代わって奮起したのは、松本隼輔選手（済3）だった。相手バッターに球をどうさせず、ヒットを許さない。3回裏までに、三振3つを奪う好投を見せた。

両チームとも決定打に欠ける中、4回表、先頭バッターがフォアボールで出塁。すると、これを含めて、1アウト満塁というまたとない絶好のチャンスを得る。ゴロを打って、相手のエラーを誘うのも作戦の一つだったという本学。続くバッターの打球は、ショート正面へのゴロとなる。アウトに点を奪取した。

この攻撃で、本学は試合の流れを一気に引き寄せていく。4回裏、1点を返されるも、相手の反撃もこまかい勝利と言えるだろう。

（新原大輔）

試合後に選手たちが駆け寄り、胴上げで優勝を喜び合う

4年連続で総合優勝

バドミントン男女

【23日　大学体育館】

めじけんが男女で出場した一般種目バドミントン。（済3）だった。相手バッターに球をどうさせず、ヒットを許さない。3回裏までに、三振3つを奪う好投を見せた。

両チームとも決定打に欠ける中、4回表、先頭バッターがフォアボールで出塁。すると、これを含めて、1アウト満塁というまたとない絶好のチャンスを得る。ゴロを打って、相手のエラーを誘うのも作戦の一つだったという本学。続くバッターの打球は、ショート正面へのゴロとなる。アウトに点を奪取した。

この攻撃で、本学は試合の流れを一気に引き寄せていく。4回裏、1点を返されるも、相手の反撃もこまかい勝利と言えるだろう。

（新原大輔）

矢吹選手の正確な動きが勝利を導いた

教職員種目

【23日　大学・高校テニコート　23日　第2クラウンド】

四大戦には、普段私たちがお世話になっている教職員の方なども多数参加している。硬式庭球、バレーボール、ソフトボールの3つの種目で戦われるこの教職員種目。本学の成績はここ数年低迷しており、決して前評判が高いとは言えない中、本番の日はやって来た。

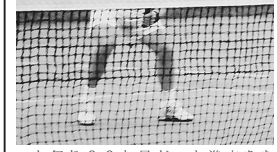
まず、2日目にあったのは硬式庭球。ダブルス3組の団体戦が、総当たり方式で行われた。第1試合で武蔵大に敗れたものの、本学は、昨年の覇者である成蹊大、そして成城大に勝利し、優勝を勝ち取った。

またこの種目には、68歳の数学科に潮謙教授も登場。片瀬教授と政治学の坂本孝治郎教授のペアは、年齢をまったく感じさせない機敏な動きを見せる。同ペアは、成城大戦で6－0の大勝利を収めるなど、本学復活の立役者となった。

翌3日目には、昨年本学が優勝しているソフトボールが行われた。実力者、力強い投球を統率力、繊細なバッティングが光り、相手に得点のチャンスを与えない。結局4点を相手に許してしまったが、本学はこの後も試合を優位に進め、18－4でゲームセットとなった。

このソフトボールでの優勝が決め手となり、本学は教職員種目で念願の優勝を果たした。惜しくもレーボールは、2位に終わってしまったが、2種目制覇という嬉しい限りの快挙である。来年も、今年の優勝に続くことができるかどうか、今から楽しみだ。

（植木太）



一般種目

堅い守りで王者復活

軟式野球

【22日　第1クラウンド】

まさに王者の戦いぶりだった。打っては連打で一気に得点、投げては凡打の山を築き、守れば鮮やかなファインプレーと、相手につけ入る隙を与えなかった。

例年、圧倒的な強さを誇るマイスター本学Aは、決勝で成蹊Aを破り優勝。思い起こせば昨年、決勝の舞台で優勝を阻まれた。あの時からこの瞬間だけを追い続けてきたのだ。

主将である岡本祐一投手（営3）は、肩が痛く調子が出なかったという。だが、そんなことを感じさせない力投を見せた。初回から1ストライトをきわどいコースに決めていく。試合後半に、池田伸一からスーパーイニングが合っていなかったので、ストレート中心で攻めました」と、池田正夫郎捕手（済4）は語ってくれた。守備陣の奮起も光り、1回表を無失点に抑えた。盛大な応援の中、両者無得点のまま試合は進んでいく。そして2回裏、ついに待望の先制点が生まれた。四球とヒットでチャンスを作り、バッターは三百博選手（法4）。真ん中に甘く入った球を強打し、走者一掃のタイムリースイングで放つ。この後もタイムリーが飛び出し、結局3点を奪って攻撃を終えた。

このリードを守りたい3回表、打線の勢いそのままに、池田伸一からスーパープレーが生まれる。驚異的な反応でホームファールフライに飛びつき、文字通りアウトを一つもぎ取った。この三振を奪い取り、ガッツポーズで大きな声を上げた。追加点が欲しい4回裏、先頭打者が出塁し、チャンスを作る。2アウトとなりながら走者は2塁に進塁。ここで、桝田晃選手（法3）の打球はライトの前へ。ランナーは3塁を蹴ってホームを狙う。惜しくもアウトになったが、終盤きてもおお積極的な走塁を見せた。そして最後を回、殺人が見える岡本投手は、ヒット2本を浴びてしまう。しかし、要所での奪三振が勝因となった。ミステリーの今会投手は、準身の直球を気持ちの良さで決め、この瞬間マイ球は見事に復活した。王者の矢城は、これからも追加点を狙っていく。

ウンドに駆け寄り、勝利の喜びをかみしめた。

（山崎晃志）

マウンドで躍動する岡本投手

惜しくも2位

バレー男子

【23日　初等科体育館】

最終日に行われた決勝戦、クエリー（本学A）の相手は成城Aだった。クエリーは、昨年、武蔵大との決勝戦に臨んだ。本学は1回裏にいきなりタイムリーを量産。相手の守備の乱れもあり、流れを一気に引き寄せる。一挙に12点を奪う猛打を見せ、初回で試合の流れを決定づけた。続く2回も、本学はヒットをコンスタントに重ね、3点を追加した。

そうして15－0で迎えた3回表、女子選手務笠小由利子さんがマウンドに立つ。川（営2）さんは、学習院女子部時代にソフトボール部で活躍した実力者。力強い投球を統率力、繊細なバッティングが光り、相手に得点を与えない。

その後4回表までは、両チームともに行進が続く。

その均衡を破ったのは、本学の打線であった。4回裏、本学はヒット4本の集中打で相手投手を打ち込む。さらに守備面のエラーにもつけ込み、得点を重ねていく。最後は内野安打の間に3塁ランナーが走り込み、試合終了。この回に一挙5得点を挙げ、7－0コールド勝で優勝を決めた。

その翌日には、SHIGEO本学Aと成蹊Gの男子決勝が行われた。昨年、同じ学習院のチームに負けたことをバネに、この1年間練習してきました。目指すのは優勝しかありません。そう力強く語ってくれたのは、石橋・輝選手（営4）。その言葉通り、本学はチーム一丸となって優勝の2文字へと突き進んでいった。

ここまで圧倒的な強さで勝ち進んできた本学。しかし決勝では、序盤からチャンスを作るものの、あと1本が出ない。1回表には、3塁打で得点圏にランナーを置きながらも、続くバッターが凡退。先制のチャンスを逃してしまう。

そんな打線に代わって奮起したのは、松本隼輔選手（済3）だった。相手バッターに球をどうさせず、ヒットを許さない。3回裏までに、三振3つを奪う好投を見せた。

両チームとも決定打に欠ける中、4回表、先頭バッターがフォアボールで出塁。すると、これを含めて、1アウト満塁というまたとない絶好のチャンスを得る。ゴロを打って、相手のエラーを誘うのも作戦の一つだったという本学。続くバッターの打球は、ショート正面へのゴロとなる。アウトに点を奪取した。

この攻撃で、本学は試合の流れを一気に引き寄せていく。4回裏、1点を返されるも、相手の反撃もこまかい勝利と言えるだろう。

（新原大輔）

2セット目をものにして喜ぶ選手たち

今年度四大戦での本学の各競技得点

正式種目

アイスホッケー	アメリカンフットボール	駅伝（男）	駅伝（女）	弓道（男）	弓道（女）	剣道（男）	剣道（女）	硬式庭球（男）	硬式庭球（女）	硬式野球	ゴルフ	サッカー	自動車	柔道	水泳	水球	スキー（男）	スキー（女）	漕艇	卓球（男）
2.5	4	1	3	3	3	4	4	3	3	2.5	/	4	4	2	4	3	3	2	2.5	/

一般種目

硬式庭球D（混）	硬式庭球D（女）	硬式庭球D（男）	合計	陸上競技	ラグビー	ラクロス（女）	ラクロス（男）	ヨット	洋弓（女）	洋弓（男）	ホッケー（女）	ホッケー（男）	フィギュアスケート	バドミントン（女）	バレーボール（女）	バレーボール（男）	バドミントン（男）	バスケットボール（女）	バスケットボール（男）	馬術
4	3	0	104.5	4	3	4	4	4	1	1	2.5	2.5	/	2.5	3	3	4	4	1	2.5

教職員種目

硬式庭球	バレーボール	バレーボール	合計	バレーボール（女）	バレーボール（男）	バドミントン（女）	バドミントン（男）	バスケットボール（女）	バスケットボール（男）	軟式野球	軟式庭球（混）	軟式庭球（女）	軟式庭球（男）	卓球（混）	卓球（女）	卓球（男）	ソフトボール（女）	ソフトボール（男）	サッカー
4	4	3	11	3	4	4	4	3	0	4	2	3	2	4	3	4	4	4	3